

エンパワメント実践におけるperspective特性の検討

—エコシステムと社会構成主義に焦点化して—

西梅 幸治¹

(2010年9月27日受付, 2010年12月13日受理)

The Consideration of Perspectives for the Empowerment Practice in Social Work
Focusing on Ecosystems and Constructionist Perspectives

Koji NISHIUME¹

(Received : September 27, 2010, Accepted : December 13, 2010)

要 旨

ソーシャルワークにおいてエンパワメント概念は、今や中核となる理念として定着し、その方法論の確立が求められている。しかしその課題は、理論的枠組み、すなわちperspectiveが未整理なことである。そこで本稿では、エンパワメント実践の特徴を整理し、そのperspectiveに関して検討を行った。その結果、エコシステムと社会構成主義が基盤となるperspectiveであることを導いた。そしてソーシャルワークにおける両perspectiveの特徴を挙げながら、それらのperspectiveとしての特性を、①基礎的特性、②方法的特性、③包括・統合的特性から分析・考察した。そのうえで両者のperspectiveとしての特性を包括・統合化することによって、エンパワメント実践を形成する枠組みを提案できることを明らかにした。

キーワード：エンパワメント、エコシステム視座、社会構成主義的見解

Abstract

Recently, the empowerment in social work has been established as a core concept, and this will require academics to build its methodology. However, the issue to build the perspectives (theoretical frameworks) for the empowerment practice has not been solved. The purpose of this paper is to analyze the characteristics of the empowerment concept and the theoretical context in the empowerment practice, and to clarify peculiarities of its perspectives. As a result, the theoretical framework of the empowerment practice is mainly consisted of ecosystems and constructionist perspectives. Ecosystems and constructionist perspectives have different features in social work. Although, by comparing both perspectives in terms of their fundamental characteristics, methodical and holistic integrated characteristics, their distinctive elements were formulated. They can be unified as reciprocal features, forming a comprehensive and integrated framework in the empowerment practice. Therefore, it has become clear that the empowerment practice can be analyzed by utilizing this framework.

Key Words : empowerment practice, ecosystems perspective, constructionist perspective

1 高知女子大学社会福祉学部社会福祉学科・講師・博士(福祉社会学) Department of Social Welfare, Faculty of Social Welfare, Kochi Women's University, Lecturer (Ph. D.)

I. はじめに

ソーシャルワークにおいてエンパワメントは、今や中核的な概念である。1960年代の米国におけるアフリカ系アメリカ人への支援を背景に、Solomon (1976) によってソーシャルワークに導入されたことは今日、定説となっている¹。Solomonは、ロサンゼルスにあるスラムの最も不便なコミュニティ機関に赴き、支援を求める人々を自らの授業に招待する。そして彼らとともに、問題の根源やゴール、そして機関やソーシャルワーカーが有効に機能する方法について確認しながらこの概念を確立した (Solomon 1976: 2)。

そのエンパワメント概念は、頸椎損傷、四肢麻痺で介助が必要な重度障害のある人による自立生活運動や、構造的で組織・制度的な女性への差別に抗するフェミニズム運動、その他にも同性愛者やエイズ患者など、社会的な抑圧下におかれる当事者の社会運動などを通じて発展した。そして今や、国際ソーシャルワーカー連盟によって、ソーシャルワーク専門職の重要な概念として認められている²。このことから、エンパワメントを志向したソーシャルワークの支援対象は、あらゆる利用者システムに拡大してきていることが理解できる。

現在では特に、エンパワメント概念を基盤とする方法の具体的な手続きや展開過程を明確化することが喫緊の課題であり、その方法や過程、技術が積み上げられている。しかしその依拠する理論は、未だ十分な整理がなされていないと考えられる。そこで本研究では、エンパワメント実践の依拠する理論的な枠組みとしてのperspectiveを分析・検討してみたい。具体的には、ソーシャルワークにおけるエンパワメント実践に関連する文献を中心に、まずエンパワメント概念の特徴をおさえ、そのうえでそれが依拠するperspectiveを指摘する。そしてそれらを代表するperspectiveを取り上げ、その特性を抽出し、エンパワメント実践を展開するためのperspectiveとしての特性を分析・考察してみたい。

II. エンパワメント概念における perspective

1. エンパワメント概念の特徴

1980年代に入り脚光を浴びたエンパワメントは、Solomon (1976) によると、ソーシャルワーカーが利用者のパワーの欠如状態に着目し、利用者との協働による支援を行うことであると強調されている³。その後、ソーシャルワークの統合化を提唱するなかでエンパワメントの重要性を指摘したParsonsら (1994: 107) は、人々が直面する問題をものともせず行動を起こすことができるように、自身を認める変化の過程であると述べている。そしてソーシャルワーカーには、利用者が自身のエンパワメント過程を引き出すことができるように支援する役割があるという。これらは、エンパワメントが利用者の主体性を強調した過程概念であり、その利用者主導の実践を、ソーシャルワーカーが側面的に支援する役割を有することを指摘している。

続いてCoxら (1994: 39) によれば、エンパワメントとは個々人がそれぞれの生活状況の個人的、対人的、もしくは政治的な側面に挑戦あるいは変革する活動に従事することであると指摘されている。またAdams (2003: 8) は、エンパワメントとは個人、グループあるいはコミュニティがその状況をコントロールできるようになることであり、自ら設定したゴールを達成することが可能になるプロセスである。それによって生活の質を最大限に向上するために活動できることであると指摘している。彼らの指摘は、ゴールを達成する過程が利用者システムとしての個人、グループそしてコミュニティとそれらを取り巻く状況を再構成するものであると理解できる。そのためエンパワメントは、生活全体を視野に入れ、ミクロ (個人変容) からマクロ (社会改革) までを志向し、展開するための概念として理解できる。またジェネラリスト・ソーシャルワークにおけるエンパワメント・アプローチを提唱するMileyら (2007) は、利用者ソーシャルワーカー各自の知識を活かす協働

を重視し、対話、発見、発達による実践過程を提示している。

さらに近年、Cowger (2006) やJohnsonら (=2004), Mileyら (2007) の見解にみられるようにストレンクス視点と関連して指摘されるエンパワメント概念は、Solomonが指摘したパワーレス状況を減少させる取り組みのみならず、利用者のストレンクスを活かしたパワーの増強過程として理解されている⁴。この視点によりソーシャルワーカーは、人間の強さや豊富な環境的資源にも目を向けることができるようになった。加えてストレンクス視点に基づく支援は、利用者の状況認識や活動を重視していると理解できる。このように利用者独自の活動と、それを支援するソーシャルワーカーとの実践から構成されてきた概念であるエンパワメントは、あらゆる利用者システムの自己肯定感・効力感と生活の質向上への支援を目標に、ストレンクスやパワーの増強をとおして、マイクロからマクロまでの生活コントロール過程を支援する概念へと変化してきたのである。

以上をふまえ、エンパワメントの特徴をまとめてみると、次の4点を主に指摘できる。

- ①人間：環境の枠組みで実践を展開すること
(環境の改善を強調)
- ②利用者のストレンクスに焦点化し、利用者の認識や活動を重視すること
- ③利用者とソーシャルワーカーが協働すること
- ④実践活動の範囲を拡大し、マイクロからマクロまでを含むこと

2. エンパワメント概念のperspective

エンパワメントは、実践現場における利用者とソーシャルワーカーの協働に、Solomon, B. B. が研究者として参加したことによって生み出された概念である。その生成過程やその後の研究によって、いくつかの理論や知識が基礎となることが指摘されてきたが、その重要な理論的枠組みとしてperspectiveがあり、既述の特徴もこれに大きく由来するといえるだろう。しかしその点におい

ても、エンパワメント実践を展開する際に、perspectiveとなるのは何か、またその関係性について未整理である⁵。そこでこのperspectiveという用語のもつ意味について整理しながら、エンパワメント実践におけるperspectiveを明らかにしてみたい。

まずperspectiveとは、Mattainiら (2002) によると、何をすべきかではなく、ケースの見方に関する手引きであると述べられている。またSaleebey (2006 : 16) も、ものの見方であり、現象を分析的に記述・説明する理論とは区別された、経験の確かな側面を考察、理解する方法であると指摘している。わが国では、視座と訳されることが多く、例えば太田 (1991 : 81) は、エコシステム視座について実践を科学的に構想する発想として理解し、この言葉を用いている。また秋山 (1999 : 50) は、一つの立場もしくは見方から現象や事象を捉え理解する視点とは区別し、基盤は一つであっても、焦点化するポイント (視点) が複数存在し、複眼的立場から現象や事象を把握する場合に視座という言葉を用いると述べている。

特にソーシャルワークにおいてperspectiveは、①利用者の生活という個別で特徴的な現実をいかに理解していくのか、②それを通じて生活支援過程をどのように考察していくのかという課題に応えるものでなければならない。特に今日のソーシャルワークは、利用者の個別で多様な生活を把握し、支援を展開することが一大特性である。そのため、生活支援過程というソーシャルワークに独自の諸特性の積み上げから構成される方法的概念を、どのようなアイデアを用いて科学的に考察するかという、具体的な枠組み、すなわちperspectiveが課題として問われることとなったのである⁶。

このようにperspectiveを現象や事象を把握する科学的な発想として理解し、エンパワメントに関する先行研究よりperspectiveを抽出してみると、それとして明記されているものは稀少であった。まずWise (2005) による家族とのエンパワメント実践を支持する理論とperspectiveでは、

一般システム理論, 生態学的視座, ストレングス視点, 家族の福利に関する理論が指摘されている。加えてMileyら(2007)は, エンパワメント実践において鍵となるperspectiveとして, エコシステム, 構成主義(Constructivism), 社会構成主義(Social Constructionism), フェミニズムを挙げている。またKirst-Ashman(2000)による, エンパワメントを志向するソーシャルワーク実践でも, エコシステムという理論が他の理論を包括するperspectiveとなることを指摘している。その他, エンパワメント・アプローチを論考するLee(1994)は, 現在のエンパワメント・アプローチが, 5つの焦点をもつビジョン(歴史的な見方, 生態学的視点, 人種・階級的視点, フェミニスト視点, 批判的な視点)をもち発展していると指摘している。エンパワメント実践においては, このようなperspectiveが重視されているといえるだろう。

3. perspectiveの基盤となるエコシステムと社会構成主義

これらの研究で指摘されているperspective間の関係性を検討すると,

- ①perspectiveとして理解されている概念間に包含関係があること
- ②perspectiveとして理解されている概念間に親和性があること
- ③エンパワメント実践に関わる利用者の特性に限定されたperspectiveがあること

が理解できる。上記①から③について具体的にみていくと, ①perspectiveとして理解されている概念間に包含関係があることについては, まず生態学的視座や一般システム理論をあげることができる。それらはperspectiveとしてソーシャルワークに用いられる場合は今日, エコシステムの構成概念として理解される場合が多い。特にエンパワメント概念がより適しているとされるジェネラリスト・ソーシャルワークのperspectiveは, エコシステムを採用している場合が多い⁷⁾。

次に②perspectiveとして理解されている概念間に親和性があることについては, 構成主義と社会構成主義両者の関係性にみることができる。この両者は, ソーシャルワークを考えるうえでは, 大きな違いはなく, 親和性があると指摘されている(例えばMileyら2007)。そして特にストレングス視点と関連しよく用いられるのは, 社会構成主義であることを付加しておきたい(例えばSaleebey2006)。また社会構成主義については今日, 批判的思考に代表される批判的な視点にも大きな影響を与えており, この視点とも親和性があるといえる(例えばGergen1999;長谷川2005;原2005)。最後に人種・階級的視点, フェミニスト視点は, 対象に限定されていることから, ③エンパワメント実践に関わる利用者の特性に限定されたperspectiveがあることに該当する。加えてそれらは, エコシステムや社会構成主義の影響も受けており, その意味では, 親和性についても考えられるところである。

このようにみていくと, エンパワメント実践のperspectiveでより基盤となるのは, ソーシャルワークの中心的なperspectiveであるエコシステムと, 社会的に抑圧されている人種・階級・女性に関わる実践の理論的背景となる社会構成主義の2つであろう。しかしこの両者については, その関係性を十分に検討した先行研究はない。

III. エコシステムと社会構成主義の特徴

1. perspectiveとしての補完性

これまでソーシャルワークでは, エコシステムを利用者の生活を把握し, 支援を行う枠組みとして適用することに共通理解が得られてきた。それは, エコシステムという発想以外に, 今のところ人間と環境からなる生活を支援する営みにアプローチし, 生活支援過程の流れを実体として把握できる方法がないといわれてきたからである(太田ら1999:22)。それはまさに, ソーシャルワークがRichmond, M. E.以来重視する, 生活という人間と環境の相互関連性を理解できるperspective

として有効であると、研究者の間で認識されてきたのである。

一方で社会構成主義は、ポストモダンの潮流からソーシャルワークに導入されてきたperspectiveである⁸。その臨床的応用がナラティブモデルであり、それに依拠する研究者たちは、システム思考(システム論、ライフモデル、エコシステム論)に替わる可能性を秘めた新しいモデルであると主張している(木原 2003:168)。社会構成主義は、いわばエコシステムというソーシャルワークに専門性を付与するperspectiveを批判し、利用者の知を活かすことを重視する立場から導入されたといえる。

しかしこれまで指摘してきたように、このエコシステム、社会構成主義の両者を相容れないものとして理解するのは、エンパワメント実践のperspectiveという文脈では性急過ぎる。昨今では、専門職性を否定・排除しようとした急進的、対決的な姿勢は軟化し、利用者とソーシャルワーカーとの協働関係のなかで双方向的に行われることの意義が再認識されつつある(和気 1998:19)。このようなソーシャルワークの研究動向をみると、より現実的なのは、現状のなかでソーシャルワーカーの専門的知見と利用者による知見を活かす、すなわちエコシステムと社会構成主義の特性と関係性をふまえ、両者をperspectiveとして包括・統合化していく手段を問うことであるように思われる。

ソーシャルワークの歴史を鑑みると、診断主義と機能主義、システム思考と生態学的発想がそれぞれ統合・止揚され、新しい発想とアプローチを生み出している⁹。このソーシャルワークの歴史からもこの観点は重要であり、検討する余地が多分にあるだろう。エンパワメント実践においては、エコシステム視座と社会構成主義の両者の関係性を理解し、統合・止揚の可能性を検討する必要がある。そこで本研究では次に、この両者がどのような特徴を保持しているのかについて明らかにしていきたい。

2. エコシステムの特徴

一般的にエコシステムは、Meyer (1995:19) が生態学と一般システム理論という二つのアイデアを包括していると述べるように、生態学と一般システム理論を統合・止揚した人間と環境の実体を捉えていくためのperspectiveである。生態学と一般システム理論の両概念については1980年代、ソーシャルワークで有効に活用するために統合化が図られた。

このようなエコシステム視座を構成するアイデアの一つである生態学は、Germain (1973) によれば、有機体と環境とを適応する過程と両者が力動的な均衡と相互関係を達成する手段に関連している科学である。そして一般システム理論については、それを提唱したBertalanffy (1969:208) によると、システムとは、相互に作用しあう部分や過程の力動的な状態を示し、そのシステムに関する科学である。特にソーシャルワーク研究領域では、例えばMattainiら(2002:19)によると交互作用している要素の集合、もしくは人間と環境のような変数の体系的な連結を表現する総体としての一般科学であると理解されている。

このように生態学と一般システム理論は、両者とも人間と環境をそれぞれ分割して扱うのではなく、一つのユニットとして捉える理論であり、人間と環境からなる生活の様々な事象を把握するために、それらの理論のもつ概念がソーシャルワークに援用されている。それぞれの主要な概念は、表1¹⁰のように示すことができる。この両概念の特性を合わせもつエコシステム視座について太田(1999:22)は、生活の広がりをもつシステムという思考方法を用いて構成要素に構造分解し、それらの関係し合う働きを機能分析するシステム理論を一方で活用し、さらに他方では、生活という営みを人間と環境とが関わり合う流れとして生態学的に捉える発想とを統合・止揚した概念として、生態学と一般システム理論を援用しながら定義している。

そのうえで、それぞれシステム思考と生態学的

視座として整理しながら¹¹、人間と環境、その相互作用からなる生活を理解し、ソーシャルワーク支援の枠組みを提供することで、専門性の確立に貢献してきたと論じている¹²。すなわちエコシステム視座は、時間の流れにある人間と環境の相互作用をシステム思考でその構造や機能から説明し、かつ生態学的な発想からその変容状況を把握することにより、生活の実体を捉えようとしているのである。

すなわちエコシステム視座は、生活という人間と環境の相互作用を、システム思考でその構造や機能を説明し、かつ生態学的な発想からその時系列な変容状況を把握することにより、生活の実体を捉え、ソーシャルワーク支援の枠組みを提供しようとしているのである¹³。このようにみていくとエコシステム視座は、

- ①ソーシャルワーク支援の枠組みを提供できる

こと

- ②生活を人間：環境の枠組みをとおして構造と機能の観点からトータルに把握できること
- ③生活の変容を時系列に捉えることができること
- ④マイクロからマクロまでの利用者と環境の相互作用を理解できること

などの点で意義があるといえる。

しかし現在では、エコシステム視座の課題も指摘されている。例えばまず、生態学的視座が本質的に保守的で現状維持を是認してしまうことである。これは、逆境や侵害の源になる制度や環境に対抗するよりも、これらのストレス状況に適応するような支援に焦点をおくことにつながる(Saleebey 2001)。また谷口(2003:42)は、Meyer, C. H.のエコシステム視座がソーシャルワーカーの思考レベルだけをエコロジカルに再構

表1 一般システム理論と生態学の主な概念

システム理論 (Systems Theories)	生態学 (the Ecological Perspective)
<ul style="list-style-type: none"> ・システム (System) — 一つのシステムは、秩序的、相互に関連し、かつ機能的な全体となる要素の集まりを意味している。 ・境界 (Boundaries) — 境界は、繰り返し生じるパターンであり、システム内の特徴を形作る。 ・サブシステム (Subsystem) — サブシステムは、従属的でそれよりも大きなシステムのなかにある下位のシステムである。 ・ホメオスタシス (Homeostasis) — ホメオスタシスは、比較的安定し、一定のバランス状態を維持しているシステムの傾向である。 ・役割 (Role) — 役割は、社会的に期待された行動のパターンであり、個人の地位や特定のグループや社会の期待によって決定される。 ・関係 (Relationship) — 関係は、相互の情緒的交流であり、力動的な相互作用である。またそれは、2つもしくはそれ以上の人々やシステムとの間に存在する感情、認知、行動的なつながりである。 ・インプット (Input) — インプットは、他のシステムから受け取るエネルギー、情報、もしくはコミュニケーションの流れである。 ・アウトプット (Output) — アウトプットは、インプットに対していくつかのシステムを経由し、それによって処理されたもの、インプットに生じた結果である。 ・ネガティブ・ポジティブフィードバック (Negative and Positive Feedback) — フィードバックは、特殊なインプットの形態であり、システム自身の成果についての情報を受け取る状態である。ネガティブフィードバックの結果として、システムは過剰や誤差を修正し、ホメオスタシスの状態に立ち戻ることができる。一方ポジティブフィードバックは、システムを維持し、発達させるために受け取る情報のインプットである。 ・インターフェイス (Interface) — インターフェイスは、個人、家族、グループ、組織、コミュニティを含んだ異なるシステムの間にある接触面である。 ・分化 (Differentiation) — 分化は、単純なものからより複雑な存在へと移行するシステムの傾向である。大人になったり、知識を獲得したり、様々な経験をすることで複雑さを増すことを示す。 ・エントロピー (Entropy) — エントロピーは、崩壊、消耗、そして死に向けて進行する過程である。 ・ネガティブエントロピー (Negative Entropy) — ネガティブエントロピーは、成長や発展に向かうシステムの過程である。 ・等終局性 (Equifinality) — 等終局性は、同じ結果につながる多くの異なる手段があることを意味する。すなわち同じ状況においても別の選択肢が存在することを示している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・社会環境 (The Social Environment) — 社会環境は、人間を網羅する状況や慣習、人々の相互作用を含んでいる。人間は生き残り、成長するために、環境と効果的な相互作用を行いながら発達する。 ・エネルギー (Energy) — エネルギーは、人間と環境との間における積極的関与によって生じるパワーである。エネルギーは、インプット、アウトプットの形態をとる。 ・インプット (Input) — インプットは、人間の生活に取り入れられたり、加えられるエネルギーの形態である。 ・アウトプット (Output) — アウトプットは人間の生活から離れ、その結果何かを引き起こすエネルギーの形態である。 ・インターフェイス (Interface) — インターフェイスは、システム理論の概念と同様で、個人と環境との相互作用が生じる接点である。アセスメントをとおして、インターフェイスは変化のための妥当な相互作用の目標を示し、その焦点となる。 ・適応 (Adaptation) — 適応は、環境の状態に適合するための能力である。それは、変化のための継続的な過程を含む。人間は、効果的な機能を保つために新しい環境に適応しなければならない。また環境も人々に応じて適応し反応する。 ・人と環境の適合 (Person: Environment Fit) — 人間と環境の適合は、個人やグループのニーズ、権利、ゴール、そして能力が個人またはグループの物理的、社会的、文化的ニーズを満たす環境の能力と対等、適合する程度である。 ・ストレス、ストレッサー、対処 (Stress, Stressor, and Coping) — ストレッサーは、生理的、情緒的な緊張を引き起こす要求、状況、要因である。ストレスは人々の内的なバランスに影響を与えるストレッサーによって、生み出される生理的、情緒的な緊張である。また対処は、適応の形態であり、否定的な感情の除去を調整するための成果であり、問題解決の戦略は、ストレッサーによる要求を処理するために適用される。 ・関係性 (Relatedness) — 関係性は、友情、社会的ネットワーク、血縁、そして社会的環境のなかの他の肯定的な関係のなかで他者と愛着の絆で結びついている状態である。 ・相互依存性 (Interdependence) — 相互依存性は、各自が他者に相互に依存することを示す概念である。人間は、お互いにインプット、エネルギー、サービスのために相互に依存し、調和する。 ・コンピテンス (Competence) — コンピテンスは、人々が生き抜くために環境に影響を与えるように動機づけられるための前提である。 ・自己肯定感 (Self-esteem) — 自己肯定感は、自身が有能で、尊重され、価値のある存在として感じられる程度を示す。 ・自己指南 (Self-direction) — 自己指南は、自身の生活をコントロールする能力や可能な限り責任のある決定をするための能力を意味する。

成しているように思われると述べ、ソーシャルワーカーの論理によって利用者の生活を構成する問題を指摘している。そして生活モデルについては、問題の本質を評価することが強調され、人間と環境の否定的(問題のある)相互作用を減少させることを目標としていることがストレンクス視点を重視する立場から批判されている(Rapp 1998: 4)。

以上のような指摘からは、エコシステム視座の課題として

- ①システムの力動性に関して均衡維持や適応を主眼におく傾向にあること
- ②ソーシャルワーカーの論理によって生活認識が構成されてしまうこと
- ③問題を定義することに焦点化してきたことなどを挙げることができる。

3. 社会構成主義の特徴

一方社会構成主義は、世界が客観的観察から生み出されるのではなく、人々の社会的な相互作用によって生み出されるという、社会的に構成される現実を重視するポストモダンの潮流から登場したperspectiveである。1990年代以降は、ポストモダン¹⁴の思想がソーシャルワークに新しい潮流をもたらしてきている。このポストモダンの思想に基づく社会構成主義やナラティブなどの影響により、近年ではソーシャルワークにおけるストレンクスやエンパワメントの意義が強調されている。この社会構成主義の特徴をBurr (2003: 2-5)は、①自明の知識への批判的スタンスをとること、②知識の歴史的、文化的特殊性を認識すること、③知識が社会的相互作用の過程によって維持されること、④知識にともなって社会的行為が成立すること、の4点から大きくまとめている。またGergen (1999: 47-50)は、社会構成主義に関する4つの前提としてそれぞれ①事実の相対性、②関係性に基づく現実の構成、③意味生成の過程、④自省を強調している。

具体的に社会構成主義では、人々が生きる生活

世界の意味的な構成に着目し、人々が自らの人生経験やそこで出会う事象に独自の意味を結びつける点に着目する。そしてその意味により現実が創造されると理解する。このような意味づけは、個人的に生成されたり、対人関係のなかで協働構築され、経験や事象に与えられる解釈となる。この意味解釈の修正により、現象は多義化すると主張する理論的立場である。この立場は、これまで当然のように営まれてきた白人、健常者、男性優位の社会を懐疑し、差別を受けてきた黒人や障害のある人、女性などの主張を支持する根拠となったのである。

そしてこのような社会構成主義の考え方は、今日のソーシャルワークに導入され、

- ①ソーシャルワーカーの専門性への批判
- ②利用者のストレンクスの重視
- ③物語メタファーを用いた実践モデルによる展開

などの点で、大きな影響を与えている。具体的にはまず、Foucaultの思想を基盤とした専門性批判の論説とも重なり、ソーシャルワーカー主導の援助展開や専門性についてソーシャルワーカーの自省を促す根拠になっていることがある(例えばMargolin=2003)。このことは、ソーシャルワーカー側よりも利用者側からのアプローチの重要性を再確認することにつながり¹⁵、利用者のもつ問題や欠陥よりもストレンクスを強調し、エンパワメント実践に有益な示唆を与えてきた(例えばSaleebey 2006)。

そしてストレンクス視点からの実践では、利用者自身の強さの自省的理解とソーシャルワーカーとの協働を通じて、利用者の生活に関する意味づけの再構成や転換を行う¹⁶。この視点は、解決志向のアプローチなどの根拠にもなっている¹⁷。また物語メタファーを用いた実践モデルとして「無知」のアプローチ、リフレクティング手法、そして書き換え療法などが、わが国では主に紹介され、ナラティブ・セラピーとして広く認識されているところである(例えばBuckmanら2008；

MacNameeら=2004)¹⁸。これらに共通する社会構成主義に基づく実践における一般的な指針と利用者を取り組む際の指針については、表2¹⁹のようにBlundoら(1999)が整理している。

そこで本論では、ソーシャルワークにおけるストレンクス視点や解決志向アプローチなどに、既に活用が試みられている社会構成主義の視座としての考え方を社会構成主義的見解²⁰として位置づけ、その特徴を整理してみたい。それは、現実という実体が、一つの真実から成立するのではなく相対化し、人々の関係性と相互作用による自省と意味づけから生成されるという考え方である。そしてソーシャルワーカーの専門性と同等、もしくはそれ以上に利用者の認識やストレンクスを重視し、協働関係をとおして利用者プラスとなる意味生成を図る過程について理解する視座であるとしておきたい。その社会構成主義的見解の特徴は、

- ①利用者の生活に関する意味づけや認識を重視すること
- ②利用者とワーカーの関係性と協働に基づき生活状況認識を構成すること
- ③利用者やソーシャルワーカーの自省(自己言

及)に焦点をおくこと

- ④利用者のストレンクスに基づく意味の生成過程を強調すること
- を指摘することができる。

しかし一方では、社会構成主義にも批判がみられる。例えば、社会の個人に対する抑圧的側面や、小集団における現実構成の過程に説得的であるが、生活や社会に関するトータルな理解が構成されないこと、特にソーシャルワークでは、個人の認識に偏り、ミクロなレベルにとどまることが問題視されている(Kondrat 2002: 439)。その点では、ソーシャルワークの実践場面で、物語メタファーの実践モデルを活用する際も同様の課題があり、カウンセラーなどの他職種ではなく、ソーシャルワークとして利用者に関わることの視野や意義があいまいになっていることが挙げられる。このように社会構成主義についても、次のような課題を指摘することができよう。

- ①現実の制度的・構造的視点が欠落すること
- ②個人の認識レベルにとどまってしまうこと
- ③ソーシャルワークの専門的視野を明示できないこと

表2 社会構成主義を用いるための指針

<p>一般的な指針</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ソーシャルワーカーは、利用者とその生活の文脈におけるユニークさを無条件に尊重する姿勢をもつこと。 ・ソーシャルワーカーは、利用者による生活への語りや予想された問題に関して好奇心と関心をもつこと。 ・ソーシャルワーカーは、構造と方法によるセラピーの文脈がその機能を承認するコミュニティの価値や信念を反映していることを認めること。 ・ソーシャルワーカーは、利用者が自己とその世界を知っているという感覚を強化する手段として、利用者の個人的現実やその維持を尊重すること。 ・ソーシャルワーカーは、問題が協働的理解、分かち合われた意味、そして代替的意味の発生の結果として解決されることを認識すること。 ・セラピーは、利用者やソーシャルワーカーの意味づけの絶え間ない交換を含んでいること。 ・インターベンションの過程は、利用者やソーシャルワーカーによって分かち合われた代替的意味に貢献する場を提供する。
<p>利用者と取り組む際の明確な指針</p> <ul style="list-style-type: none"> ・利用者がいるところからはじめ、利用者とともに立ち止まること。 ・無知の姿勢を維持すること。 ・利用者の発言や意味づけを理解していると決めつけないこと。 ・利用者の説明や理解、もしくは意味づけを必要とすること。 ・物語、ストーリーを構成すること。 ・利用者の内在的な文脈に取り組むこと。 ・利用者の外在的な文脈に取り組むこと。 ・新しい意味を創造すること。 ・利用者や協働すること。

IV. エンパワメント実践の形成に関する perspective特性の比較考察

1. 基礎的特性

以上のエコシステムと社会構成主義の特徴をふまえたうえで、さらに両者を比較してそのperspectiveとしての特性を分析してみたい。そのことによって両者の差異を考察し、その相互補完性をみい出していくことでエンパワメント実践を形成するためのperspective特性をより詳細にしていくことができよう。そのためまずは両者の基礎的特性を対比して分析・考察していく。

ところでエコシステムの元となるシステム理論や生態学理論、そして社会構成主義は、ソーシャルワーク実践方法の具体化を意図する基礎理論である。それゆえ、システム理論や生態学理論、社会構成主義理論という基礎理論そのものから分析するのではなく、ソーシャルワークにおけるエンパワメント実践の基盤となるperspectiveとしての特性をみい出すことが最終目標となることから、エコシステム視座と社会構成主義的見解という応用的観点から分析してみたい。すなわち以下については、エコシステム視座と社会構成主義的見解の特性分析ということになる。

具体的には、システム思考と生態学的視座の方法的な特性比較をとおして、エコシステム視座の実践特性を整理した太田（1992：99-103）の分析に依拠しながら、明らかにしていきたい。その理由は、元来エコシステム視座がシステム思考と生態学的視座のもつ特性から成立しており、また3者の比較をとおしてより詳細にエコシステム視座と社会構成主義的見解を明確化できると考えたからである。その分析をふまえると、システム思考、生態学的視座、そして社会構成主義的見解の基礎的特性は、表3のように対照的に整理することができる。

まずシステム思考は、物理学や組織工学からの経緯をもっているのに対して、生態学的視座は、生物学や生物環境学、生物有機体論や進化論からである（太田1992：99）。システム思考は、太田

（1992：100）によると、人為的で価値評価を排して没価値的にものごとを捉え、論理的に整備されたシステムだった関係から組織をみる思考過程であり、無機的な超自然事象でもって把握される実体の特性理解である。そして実体の事実を冷静かつ緻密な関係概念で構造的に分析することから、観念的な不可視性を帯びるもののシステム化された合理的な実体のハード的な理解を容易にしてくれる特性をもつと指摘されている。

次に生態学的視座について太田（1992：100）は、実体の特性を、生きた生活体として自然なあるがままの姿で、価値評価を含め、その生きざまを状況としてビジュアルに感覚的かつ実証的に感じとる視点に特徴がある。そして生活を広い視野から時間としてソフト感覚で捉える視点であると指摘している。

最後に社会構成主義的見解については、Bergerら（=2003）による現実の社会的構成にみられる現象学的社会学を契機に、特にソーシャルワーク領域への導入には、Gergenら（1999）を中心とした社会心理学からの影響が大きく、システム理論と対比されるソフト感覚を重視する特徴をもつ。そしてそれは、多くの価値を含んだ実体を、物語性を帯びた言説事象と捉え、その構成の仕方に着目して理解する見解である。また生活世界という日常的な実践の積み重ねを通じて生きがいへの認識を得ながら、未だ明らかでない周辺的で非可視

表3 基礎的特性

エコシステム (システム思考) —— (生態学的視座)		社会構成主義 (社会構成主義的見解)
組織工学	生物学	社会心理学
論理性	実証性	実践性
人為性	自然性	物語性
超自然事象	自然事象	言説事象
組織体	生活体	構成体
没価値志向	価値志向	多価値志向
関係概念	状況概念	転換概念
ハード	ソフト	ソフト
不可視性	可視性	非可視性
思考性	感覚性	認識性

的な事象や対象に着目し、その意味や状況を弁証法的な転換により生成し、変容していくための体験や実践を重視する特性をもっている²¹。

2. 方法的特性

システム思考、生態学的視座、加えて社会構成主義的見解の基礎的特性をおさえたうえで、次には、ソーシャルワーク実践に通じる方法的特性に関して同様に3者の比較をとおして考察してみたい。システム思考、生態学的視座、そして社会構成主義的見解の方法的特性は、表4のように対照的に整理することができる。まずシステム思考とは、分析・統合という特徴ある方法を通じて、実体の構成や構造と機能を析出しながら、ミクロを基点にマクロへとフィードバックさせ、実体を分析することから多様化する特性を、抽出化して整理する静態的な説明概念である(太田1992:100)。それに対して生態学的視座とは、統一性や全体性という視点から、その素性として実体の内容が包摂する変容過程を、動的に把握しようとする特性をもっている。実体をマクロを基点にミクロへと循環する視野から捉えようとするのである。またその視野は、例えば生活という実体を、過程という時間と空間の流れとして単一化し、具象的に把握しようとするところに方法的な特徴があると理解されている(太田1992:100-101)。

一方社会構成主義的見解では、人間が日常的相互作用から生じる諸言説の重なる意味の世界に生きていると考える。そこでは、個人的な力と選択を通じて、ある種の言説を変化させることができるのである。例えばBurr(2003:66)は、Sawicki, J.の指摘を引用し、人間が言説によって構成されているけれども、この主体は、いまだ批判的に歴史的反省ができるし、自身のために取り上げる言説や慣習に、何らかの選択をすることもできると述べている。

そのため特徴としては、まず人々の統御性と言説の再構成がある。またGergen(1999:145)によるとこのような現実には、関係性から生み出され

る意味によって創出され、その意味は、言説の差異に依拠するものである。すなわち人々は、それぞれがもつ現状への意味づけの違いから、新たな言説を生むことになる。このように本質としての実体ではなく、実際の状態、すなわち実態として意味の観点から認識する概念的特徴がある。

さらに社会構成主義に基づくセラピーでは、①意味への焦点化、②共同構成としてのセラピー、③関係性への焦点化、④価値への感受性、を重視している(Gergen 1999:169-170)。すなわちこの見解では、対人支援の場面において、関係性を通じて意味生成を図りながら、新たな解釈を生むための意味の多義性を強調しているのである。そのなかでは、関係性が現実を日常的な実態として創造することを前提に、協働的な対話と了解を通じたミクロの視点から、文化やそのもつ価値の支配的でマクロな言説を、自覚的に読み取りながら具現性を誘発していくのである。例えばフェミニズム運動では、この考え方を応用し、男性と女性の社会的な価値や役割の違いに焦点をあて、これまでの社会が男性優位に意味づけ構築されてきたこと(言説)を指摘し、女性の復権(という新しい言説)に取り組み、新たな現実を生成しようとしているのである。

このように社会構成主義的見解では、統御性をもつ認識主体が関係性を通じて、差異による多義性をもつ意味に着目し、その生成を図りながら、

表4 方法的特性

エコシステム (システム思考) —— (生態学的視座)		社会構成主義 (社会構成主義的見解)
統合性	統一性	統御性
分析性	全体性	構築性
説明概念	実体概念	了解概念
構成	素性	差異
構造機能	変容過程	意味生成
形式	内容	解釈
多様性	単一性	多義性
静態	動態	実態
ミクロ	マクロ	ミクロ
抽象性	具象性	具現性

実体の新たな解釈を生むことを強調する点に特性がある。またそれは、ミクロからマクロまでの言説を自覚的に読み解き、その自省をとおして具現性を誘発しながら、実態として構築・了解しようとするところに方法的な特徴があるといえよう。

3. エンパワメント実践における包括・統合的特性

これまで実践枠組みに関して、システム思考、生態学的視座、そして社会構成主義的見解の基礎的特性、方法的特性を比較考察してきた。この比較は、それらの特性や対照関係を明確にするために、3者のなかでもっともその傾向があると思われる特徴を示したものである。

このようにみていくと、エコシステム視座と社会構成主義的見解の両perspectiveは、エンパワメント実践を形作るうえでの視点や方法に相違があるというよりは、相互補完性をもつと考えられる。なぜならそれらは、ソーシャルワークにおいて対照的であるがゆえに相互補完的に作用し合い、相乗効果を生み出す要素を有していると考えられるからである。そこで最後に、エコシステム視座と社会構成主義的見解を比較し、ソーシャルワークにおけるエンパワメント実践枠組み、すなわちperspectiveを形作るうえでの包括・統合的特性を抽出して、両者が補い合い融合しながら、包括・統合的な実践枠組みを形成するための要素に関して考察してみたい。

まずエコシステム視座は、ソーシャルワーカーの知を、社会構成主義的見解は、利用者の知を活かす理論的背景をもつことがある。これは、両perspectiveのソーシャルワーク領域への導入背景とも関わる特性であるため、理論そのものに内在するというよりはむしろ外在的な特性といえよう。そして一方でエコシステム視座は、人間：環境の交互作用からなる生活という実体を、システム思考でその構造や機能を説明し、かつ生態学的な発想からその時系列な変容状況を把握する点に特徴がある。他方で社会構成主義的見解は、人間：

環境というソーシャルワークの専門的枠組みを、利用者の語る生活認識と同等の知識として扱う。加えてその二つを物語として織り交ぜていくことで、生活を考える枠組みを構成し、協働によって生活理解を形成する。

すなわちエコシステム視座は、生態学的特性から、実体の実像をそのままトータルに把握、観察しようとするものであるが、その動態を理解可能な方法で表現するためには、記述や説明を行うことができるシステムの特性が必要となる。そしてそのような実像理解を誰の視点で、どのように解釈するのかを視野に入れるとき、社会構成主義的見解が重要となるのである。そこでは、エコシステム視座により生活を構造と機能の側面からトータルに客体化し観察的に把握すると同時に、社会構成主義的見解からそれを主体的な意味づけをとおして解釈し生活を認識する。このようにエコシステムと社会構成主義的見解両者の特性である、生活の構造・機能・意味、観察と解釈、主体と客体を融合することによって、利用者の生活を理解するのである。このことによって、エンパワメント実践の特徴である利用者のストレングスに焦点化し、利用者の認識を重視しながら、人間：環境の枠組みで実践を展開することが可能となる。

またエコシステム視座では、実体がどのような構成となっているか、その要素と要素の関係性を分析していく点に特徴があるが、社会構成主義的

表5 エンパワメント実践における包括・統合的特性

エコシステム視座	社会構成主義的見解
ワーカーの専門知	利用者の知
人：環境図式	物語図式
観察	解釈
客体	主体
状況認識	認識転換
構造・機能	意味
変容過程	生成過程
生活構成の関係性の把握	関係性による生活の構成
目的志向性	価値志向性
均衡維持	脱構築

見解では、その実体がどのように構成されていくか、その構成のされ方を理解していく点に特徴をもっている。それらを包括・統合すると端的には、関係性を通じて、関係性をみることができるようなperspectiveを構築できるといえよう。すなわち生活における人間と環境の関係性と、それを捉える視点の関係性を理解することができるのである。それによって利用者の見方や認識を最大限活かし、エンパワメント実践において特徴的な利用者とソーシャルワーカーとの協働による対話を可能にする。

最後に過程という側面からみると、一方でエコシステム視座は、客体的な状況を認識し、目的遂行を通じた変容過程をミクロからマクロまでをとおして時系列に捉える点に特徴があるが、他方で社会構成主義的見解は、その状況認識への意味づけの差異に着目し、新たな価値と意味の生成を通じた認識の転換過程に特徴がある。それは、固定化された構造下での均衡維持に向かう特徴を保持しつつ、ある時には構造転換への脱構築をとおして新たな生活構造と機能を生成する意味を重視する。その意味は、利用者やソーシャルワーカーの自省によって生起するものである。エンパワメント実践過程という点では、問題、もしくはパワーレス状況にある生活構造を、ストレングス側面から見直すことで、肯定的な生活構造とそのもとの機能を作用させ、環境へ働きかける過程を説明することができる。以上のようにこの包括・統合的perspectiveによってエンパワメント実践展開が可能になるといえよう。

V. おわりに

エンパワメントを達成するうえでは、例えばまず対話を通じて利用者のストレングスや社会的・文化的なパワーレス状況を読み解きながら、新たな意味をみい出す必要がある。そのためにはエコシステムのようなミクロだけでなく、メゾ、マクロを含めた生活をトータルに把握するperspectiveが必要である。ソーシャルワークにおけるエンパ

ワメント実践では、人間と環境の枠組みが特徴となることからこのperspectiveが不可欠である。その意味では、社会構成主義からエンパワメント概念自体が批判を受けるのかもしれない。

しかし社会構成主義のみで別の見方を排除し、その正当性を主張することは、社会構成主義の見方に利用者を当てはめることになり、論理矛盾を招くのではないだろうか。エンパワメント実践において社会構成主義を採用することの意義は、ソーシャルワークのもつ専門性を意識せずに利用者と接することこそ、利用者への権力行使につながるとの自覚を促すことにある。エンパワメント実践においては、ソーシャルワーカーの専門性を通じて利用者のエンパワメントを促進するために、やはりエコシステム視座と社会構成主義的見解の両perspectiveを相互補完的に包括・統合化し用いることが必要となる。ソーシャルワーカーがエコシステムというレンズを使い、利用者生活を把握する権力への自覚をしながら、利用者との協働を可能とする包括・統合的perspectiveこそが求められるのである。

以上をとおして、エンパワメント実践におけるエコシステム視座と社会構成主義は、その実践展開で基盤となるperspectiveであることが理解できた。加えてエンパワメント実践においては、その両者が単に場面に応じて単独で活用されるだけでなく、特性分析をとおして、包括・統合的特性を保持していることも導くことができた。この包括・統合的特性をふまえると、構成的エコシステム視座といえるような利用者の見方や認識を最大限活かしたperspectiveを提供できる。それは利用者の認識をエコシステム化してソーシャルワーク支援に活かし、協働によって利用者のエンパワメントを図る実践枠組みとして考えられるであろう。具体的な実践展開としては、多様かつ多層なレベルで考えられるが、両者の特性を活かした実践の試みは、すでに始まりつつある。その応用展開についてはさらに精緻化し、今後検討していきたい。

本研究は、文部科学省平成22～24年度科学研究費補助金（課題番号：22730439）を受けて実施した研究成果の一部である。

- 1 アメリカにおけるエンパワメントの伝統が、1890年代から存在すると主張するSimon (1994) や、その源泉が機能主義にあるとの指摘もあるが、このことはLee (1994) によっても指摘され、小松 (2002) をはじめわが国においても定説となっている。
- 2 連盟のソーシャルワークの定義では「ソーシャルワーク専門職は、人間の福利（ウェルビーイング）の増進を目指して、社会の変革を進め、人間関係における問題解決を図り、人びとのエンパワメントと解放を促していく。ソーシャルワークは、人間の行動と社会システムに関する理論を利用して、人びとがその環境と相互に影響し合う接点に介入する。人権と社会正義の原理は、ソーシャルワークの拠り所とする基盤である」とされ、ソーシャルワークの理念として定着している（国際ソーシャルワーク学校連盟ほか2009）。
- 3 Solomon (1976:19) は「スティグマ化されている集団のメンバーであることに基づく否定的評価によって、生み出されたパワーの欠如状態を減らすことを目指す利用者もしくは利用者システムとの諸活動に、ソーシャルワーカーが関わっていく過程である」と定義した。
- 4 Cowgerら (2006:97) は、エンパワメントの促進が、生活困難を解決するストレングスや可能性を人々が所有するだけでなく、彼らのストレングスを増大し、それによって社会の福利に貢献することを意味すると述べている。またJohnsonら (=2004:45) によると、ストレングス視点に基づくことは、変化が可能であり、クライアントが自分自身をエンパワーできるとしている。
- 5 そのことについては、Simon (1994: Xiii) もエンパワメントという新造語は、比較的新しく、その用語を意味するperspectiveはないと指摘している。またわが国でも久保 (2000:132) が、エンパワメント実践の基礎が確立していないため、パースペクティブの拡散を招き概念的混乱があると述べている。
- 6 例えば太田 (1992:61) が、人間の生活を实体にそくして把握する視点と援助学としてのソーシャル・ワークの特性を、いかに方法として具体化するかという課題、そして社会福祉が一大目標とする実践を過程を通じてダイナミックに掌握する方法とを統合しながら、ソーシャル・ワーク実践に固有なアプローチを構築しようとする実践概念が、生活援助過程といわれる中心概念であると述べ、ソーシャルワーク実践研究の課題としていることから理解できるところである。なお太田は、現在では援助という言葉を支援に、援助学を支援科学に置き換えて、より利用者中心の視点から考察を深めている。
- 7 エンパワメント概念がジェネラリスト・ソーシャルワークやジェネラル・ソーシャルワークに適していることは、Duboisら (1996) やPoulin (2005)、わが国では太田ら (1999) などの文献にみることが出来る。そのperspectiveとしては、システムやエコロジカルではなく、生態学的システムやエコシステムとして採用されることが多いといえよう。
- 8 ソーシャルワークがポストモダンに関心をよせてきたのは、Hartman (1990;1991) によるところが大きい。彼女は、知識が研究者や実践者だけではなく、利用者の貢献がなければ発展してこなかったことを指摘した。さらにソーシャルワークの関心の広さと深さは、単一の理論だけでは補いきれないと主張したのである。そこで従来の科学的方法とは一線を画し、客観性や普遍性を懐疑する社会構成

- 主義に着目したのであった。
- 9 特に診断主義と機能主義との統合には、診断主義の立場で機能主義の見解のなかから、実際に役立つものを取り入れたPerlmann, H.や、機能主義の見解をとりながら両者を統合して力動主義の立場を主張したAptekar, H.などの貢献がある（仲村2003：27）。
 - 10 本表は、Kirst-Ashman（2000：14-24）を参考に筆者が作成したものである。
 - 11 太田（1992：79）によるとシステムとは、ある実体の現実を把握するために、それを構成している秩序だった要素と、その要素の結合がもたらす独特な生態的均衡関係からなる統合的全体性を意味する概念で、その実態を形式的に構造・機能・変容（過程）の3特性に分解しながら統合的に考察しようとするものであると定義し、このような思考方法をソーシャルワーク支援に援用しようとしている。また生態学的視座については、人間の生活という生きざまが、人と環境との相互変容関係より生成・循環されるところから、人の適応能力を高め、環境を整備することによって、再び両者の適合関係を改善するよう働きかける発想であり、それによって生活が変容していく過程であると定義している。
 - 12 人間と環境の相互関連性からなる生活を捉えることは、Coadyら（2008：6）による環境における人の視野が、ソーシャルワークを他の援助／相談援助職と区別することができる主な要因であるとの指摘からも、ソーシャルワークの専門的視野であるといえる。
 - 13 ここでは、太田のエコシステムに関する指摘を中心に検討している。太田のエコシステムは、Parsons, T.に由来する社会システム論の影響を受け、システムの構造・機能・変容を中心概念としているが、海外の研究者も、システムの基礎として、それらに着目していることに変わりはない（Mattainiら2002；Johnsonら=2004）。彼らは、さらにそれらの状態や関係性をエコロジーとシステムの各種概念によって詳細な説明を加えている。
 - 14 ポストモダンの思考は、論理性、客観性、普遍性を追求してきたモダンの思考への警鐘である。現実には、観察者から独立して成立せず、そのため知識は、客観的真実を表すというよりはむしろ相互主観的で、観察者集団の言説として表現されたものである。基本的には、現実の主観的であり、言語が社会的現実の構造を構成していることを支持する立場である（Lehmannら2001：281-283, 305参照）。
 - 15 このことは、Pozatek（1994：399）がポストモダンの影響によって、もはやソーシャルワーカーの状況判断が利用者の経験と同じであると仮定できないことをGergen, K. J.の論拠に基づき述べていることから理解できる。
 - 16 Earlyら（2000）によると、利用者と共に状況、希望する結果、そしてゴールの追究や結果を生み出す方法へのアイデアに関する彼女、もしくは彼の定義を分かちあうことから始まることが指摘されている。
 - 17 De Jongら（1995）は、利用者のストレスを引き出すために、解決志向の面接の必要性を指摘している。
 - 18 「無知」のアプローチは、Anderson, H.とGoolishian, H.によって、リフレクティング手法は、Anderson, T.によって、そして書き換え療法は、Epstein, D.とWhite, M.によって、それぞれ提起されている。
 - 19 本表は、Blundoら（1999）の指摘をもとに筆者が作成した。
 - 20 米国文献では、Constructionist perspectivesやSocial Constructionist Thinkingと表記するものがあり、ここではそれを参考にした。
 - 21 この点については、わが国でも杉万ら（2003：70）が、Gergen, K. J.らの提唱する社会構成主義とその理論からみる実体について、次のように紹介している。社会構成主義は、実

証の学に代えて、実践の学を志向する。流動する関係的世界こそ、何にも先行する基底的存在である。私たちが、通常、既に外在すると信じている現実世界は、実は、関係的世界に作動する社会的構成の産物に他ならない。

文献：

- Adams, R. (2003) *Social Work and Empowerment*, Palgrave Macmillan.
- 秋山薊二 (1999)「第2章 ジェネラル・ソーシャルワークの実践概念」太田義弘・秋山薊二編『ジェネラル・ソーシャルワーク—社会福祉援助技術総論—』光生館, 43-82.
- Berger, P. L. and Luckmann, T. (1966) *The Social Construction of Reality : A Treatise in the Sociology of Knowledge*, New York. (=2003, 山口節郎訳『現実の社会的構成—知識社会学論考—』新曜社.)
- Blundo, R. and Greene, R. (1999) Social Construction, Greene, R. R. ed. *Human Behavior Theory and Social Work Practice*, Walter de Gruyter.
- Burr, V. (2003) *Social Constructionism*, Routledge.
- Buckman, R., Kinney, D. and Reese, A. (2008) Narrative Therapies, Coady, N. and Lehmann, P. eds. *Theoretical Perspectives for Direct Social Work Practice : A Generalist-Eclectic Approach*, Springer, 369-399.
- Coady, N. and Lehmann, P. (2008) An Overview of Rationale for a Generalist- Eclectic Approach to Direct Social Work Practice, Coady, N. and Lehmann, P. eds. *Theoretical Perspectives for Direct Social Work Practice: A Generalist-Eclectic Approach*, Springer, 3-39.
- Cowger, C. D., Anderson, K. M. and Snively, C. A. (2006) Assessing Strengths : The Political Context of Individual, Family, and Community Empowerment, Saleebey, D. ed. *The Strengths Perspective in Social Work Practice*, Allyn and Bacon, 262-268.
- Cox, E. and Parsons, R. (1994) *Empowerment-Oriented Social Work Practice with the Elderly*, California : Brooks / Cole.
- De Jong, P. and Miller, S. D. (1995) How to Interview for Client Strengths, *Social Work*, 40(6), 729-736.
- Dubois, B. and Miley, K.K. (1996) *Social Work : An Empowering Profession*, Allyn and Bacon.
- Early, T.J. and GlenMaye, L. F. (2000) Valuing Families : Social Work Practice with Families from a Strengths Perspective, *Social Work*, 45(2), 118-130.
- Germain, C. B. (1973) An ecological perspective in casework practice, *Social Casework*, 54, 323-330.
- Gergen, K. J. (1999) *An Invitation to Social Construction*, Sage Publications.
- Gutiérrez, L. M. (1991) Empowering Women of Color : A Feminist Model, Bricker-Jenkins, M., Hooyman, N. R. and Gottlieb, N. eds. (1991) *Feminist Social Work Practice in Clinical Settings*, Sage Publications, 119-214.
- Hartman, A. (1990) "Many Ways of Knowing" , *Social Work*, 35(1), 3-4.
- Hartman, A. (1991) "Words Create Worlds" , *Social Work*, 36(4), 275-276.
- 長谷川芳典 (2005)「スキナー以後の行動分析学 (15)社会構成主義との対話」『岡山大学文学部紀要』44, 43-62.
- 原久美子 (2005)「ソーシャルワーク教育における批判的思考の可能性」『人間の福祉』17, 163-175.
- Johnson, L. C. and Yanca, S. J. (2001) *Social Work Practice : Generalist Approach*, Allyn

- and Bacon. (=2004, 山辺朗子・岩間伸之訳『ジェネラリスト・ソーシャルワーク』ミネルヴァ書房.)
- 木原活信 (2003)『対人援助の福祉エートソーシャルワークの原理とスピリチュアリティ』ミネルヴァ書房.
- Kirst-Ashman, K. K. (2000) *Human Behavior, Communities, Organizations, and Groups in the Macro Social Environment : An Empowerment Approach*, Brooks/Cole.
- 国際ソーシャルワーク学校連盟・国際ソーシャルワーカー連盟・社団法人日本社会福祉教育学校連盟 (2009)『ソーシャルワークの定義 ソーシャルワークの倫理：原理についての表明 ソーシャルワークの教育・養成に関する世界基準』相川書房.
- 小松源助 (2002)『ソーシャルワーク実践理論の基礎的研究—21世紀への継承を願って—』川島書店.
- Kondrat, M. E. (2002) Actor-Centered Social Work : Re-visioning Person -in- Environment through a Critical Theory Lens, *Social Work*, 47(4), 435-447.
- 久保美紀 (2000)「第5章 エンパワーメント」加茂陽編『ソーシャルワーク理論を学ぶ人のために』世界思想社, 107-135.
- Lee, J. A.B. (1994) *The Empowerment Approach to Social Work Practice*, Columbia University Press.
- MacNamee, S. and Gergen, K. J. (1992) *Therapy as Social Construction*, Sage Publication. (=2004, 野口裕二・野村直樹訳『ナラティブ・セラピー—社会構成主義の実践—』金剛出版.)
- Margolin, L. (1997) *Under The Cover of Kindness : The Invention of Social Work*, The Rector and Visitors of the University of Virginia. (=2003, 中河伸俊・上野加代子・足立佳美訳『ソーシャルワークの社会的構築—優しさの名のもとに—』明石書店.)
- Mattaini, M. A., Lowery, C. T. and Meyer, C. H. eds. (2002) *Foundations of Social Work Practice : A Graduate Text*, NASW Press.
- Meyer, C. H. and Mattaini, M. A. eds. (1995) *The Foundation of Social Work Practice*, NASW Press.
- Miley, K. K., O'Melia, M. and Dubois, B. L. (2007) *Generalist Social Work Practice : An Empowering Approach*, Allyn and Bacon.
- 仲村優一 (2003)『仲村優一社会福祉著作集第三卷 社会福祉の方法—ケースワーク論—』旬報社.
- 太田義弘 (1992)『ソーシャル・ワーク実践とエコシステム』誠信書房.
- 太田義弘編 (1999)『ソーシャルワーク実践と支援過程の展開』中央法規.
- 太田義弘・秋山薊二編 (1999)『ジェネラル・ソーシャルワーク—社会福祉援助技術総論—』光生館.
- 太田義弘 (2003)「ソーシャルワークの臨床的展開とエコシステム構想」『龍谷大学社会学部紀要』21, 1-17.
- Parsons, R. J., Jorgensen, J. D. and Hernandez, S. H. (1994) *The Integration of Social Work Practice*, Wadsworth.
- Poulin, J. (2005) *Strengths-Based Generalist Practice : A Collaborative Approach*, Brooks / Cole.
- Pozatek, E. (1994) The Problem of Certainty : “Clinical Social Work in the Postmodern Era” , *Social Work*, 39(4), 396-403.
- Rapp, C. A. (1998) *The Strength Model : Case Management with People Suffering from Severe and Persistent Mental Illness*, Oxford University Press.
- Saleebey, D. (2001) *Human Behavior and*

Social Environments : A Biopsychosocial Approach, Columbia University Press.

Saleebey, D. ed. (2006) *The Strengths Perspective in Social Work Practice*, Allyn and Bacon.

Simon, B. L. (1994) *The Empowerment Tradition American Social Work*, Columbia University Press.

Solomon, B. B. (1976) *Black Empowerment : Social Work in Oppressed Communities*, Columbia University Press.

杉万俊夫・深尾誠 (2003) 「第3章 実証から実践へーガーゲンの社会心理学ー」小森康永・野口裕二・野村直樹『ナラティブセラピーの世界』日本評論社, 55-71.

谷口泰史 (2003) 『エコロジカル・ソーシャルワークの理論と実践ー子ども家庭福祉の臨床からー』ミネルヴァ書房.

和気純子 (1998) 『高齢者を介護する家族ーエンパワメント・アプローチの展開にむけてー』川島書店.

Wise, J. B. (2005) *Empowerment Practice With Families In Distress*, Columbia University Press.